童謡・唱歌のふるさと中野市
～故郷、朧月夜、カチューシャの唄誕生100周年～

ふと口ずさむ「あの歌」、歌えばその情景を思い描く「この歌」―。童謡・唱歌には、日本人の心に染み込むような力があります。

中野市が生んだ二人の偉大な音楽家「高野辰之」と「中山晋平」が作詞・作曲した童謡・唱歌は、文化庁と公益社団法人日本PTA全国協議会が平成18年に行った「親子で歌いつごう 日本の歌百選」に、全体の約1割となる11曲が入りました。

日本人にとって無くてはならない歌―。そんな歌を作った二人の代表曲「故郷」「朧月夜」「カチューシャの唄」が平成26年で誕生100周年を迎えました。単なる「その時代の流行歌」ではない、未だに歌い継がれる理由がこの歌にはあるのです。

二人が生まれ育ち、音楽家の原点となったこの中野市。周りを見れば、100年前と変わらない雄大な自然があり、誰もが思い描く「日本のふるさと」が広がっています。

かの山、かの川、菜の花畑―。高野辰之はどんな風景を思い描き「故郷」「朧月夜」を作詞したのでしょうか―。また、中山晋平はどのような思いで「カチューシャの唄」を作曲したのでしょうか―。

さあ、「故郷」「朧月夜」「カチューシャの唄」を口ずさんでみましょう。そこにはきっと、自分だけの心の情景が浮かび上がるはずです。

※この特集は平成26年6月に行われたものです。

※ QR コードを読み込むとメロディーが流れます。

故郷（ふるさと）

作詞／高野辰之
作曲／岡野貞一

うさぎ追いし　かの山
小ぶなつりし　かの川
夢は今も　めぐりて
忘れがたき　ふるさと

いかにいます　父母
つつがなしや　友がき
雨に風に　つけても
思いいづる　ふるさと

志を　果たして
いつの日にか　帰らん
山は青き　ふるさと
水は清き　ふるさと

▲生家のある永江地区からは、かの山（熊坂山・大平山）が望めます
◀ふるさと橋のたもとには、かの川(班川）に沿って、遊歩道があります

文部省唱歌「故郷」は、「尋常小学唱歌（六)」（大正３（1914）年文部省）に初めて掲載されました。
作詞者の高野辰之と作曲者の岡野貞一は、ともに東京音楽学校教授と文部省小学校唱歌教科書編纂委員を兼任し、多くの名作唱歌を世に送りました。市内に現存する作詞者が生まれ育った家の裏手には、ウサギ追いを楽しんだ「かの山」が拡がり、反対側には小鮒を釣った「かの川」が流れています。

朧月夜（おぼろづきよ）

作詞／高野辰之
作曲／岡野貞一

菜の花畑に　入り日うすれ
見わたす山のは　かすみ深し
春風そよふく　空を見れば
夕月かかりて　においあわし

里わのほかげも　森の色も
田中の小道を　たどる人も
かわずの鳴く音も　かねの音も
さながらかすめる　おぼろ月夜

▲曲中の「鐘の音」と言われている眞宝寺の鐘楼

▲春の永江地区には、菜の花が咲き誇る景色が広がります

「朧月夜」は故郷と同じく、「尋常小学唱歌（六)」に掲載されました。作詞者の辰之は、下水内高等小学校（現飯山市役所の場所）から下校途中の辺りに咲き乱れる「菜の花」を歌に詠んだとされています。
しかし、当時学校までの通学距離約11㎞の間であちこちに栽培されており、具体的な場所は特定されていません。また、辰之が幼い頃よく遊んだとされる眞宝寺にある鐘楼が、曲中の「鐘の音」と言われていますが、同じ北永江の天正寺（生家から３分程度辰之生家の菩提寺）だとする説もあります。

カチューシャの唄(うた)

作詞／島村抱月
　　相馬御風
作曲／中山晋平

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
せめて淡雪　とけぬ間と
神に願いを（ララ）かけましょか

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
今宵一夜に　降る雪の
明日は野山の（ララ）路かくせ

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
せめて又逢う　それまでは
おなじ姿で（ララ）いてたもれ

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
つらいわかれの　涙のひまに
風は野を吹く（ララ）日はくれる

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
ひろい野原を　とぼとぼと
ひとり出ていく（ララ）あすの旅

▲記念館敷地内にカチューシャの像があります

「カチューシャの唄」は、大正３（1914）年３月、島村抱月と松井須磨子の芸術座第３回公演に上演されたトルストイ原作「復活」の劇中歌です。「学校の唱歌でも困るし、教会の讃美歌でも困る。西洋の音楽と日本の民謡の中間を…」との抱月の難しい注文に、晋平は呻吟するばかりでした。曲の途中で民謡の囃子言葉のように「ララ」と扱って、曲全体を引き締めているのが特徴で、数千枚売れれば大当たりと言われた当時で２万枚以上を売り上げたという説もあるほど、空前の大ヒット曲となりました。